

Young Officials' Camp 2010

参加報告書

報告者 板井 優哉

- 期間 8月13日(金)～8月15日(日)
- 会場 埼玉県立スポーツ研修センター / 埼玉県立上尾運動公園体育館
- 参加人数 50名 (内訳: 男性34名、女性16名)
- スケジュール
- 8月13日(金) 【1日目】
- 12:30 受講者受付
- 13:00 開講式 【プラザ22】
- 1.部会挨拶と講師紹介 (関口 知之 副部長)
 - 2.諸連絡 総務委員会
- 13:15 <講義Ⅰ> 「アスリートと食事について」
講師: 河谷彰子氏 (株式会社レオックジャパン/横浜 FC 栄養管理士)
- 14:15 <映画>
映画上映「REFEREE」
- 16:00 <講義Ⅱ> 「英会話の重要性」
講師: 梶川三枝氏 (SPORTS FOR SMILE、元デトロイトピストンズ)
- 16:30 諸連絡 総務委員会
- 16:35 移動
- 17:05 研修センター講堂集合
- 19:00 <講義Ⅲ> 【研修センター講堂】
「Fundamental (2 Person System) ・よい審判員になるためには」
講師: Mr.Costas Rigas (FIBA)
- 20:30 班別ミーティング 【各部屋】
- 8月14日(土) 【2日目】
- 9:30 <実技Ⅰ> 【上尾運動公園体育館】
講師: 吉田 利治氏 倉口 勉氏 平原 勇次氏 吉田 憲生氏
※高校生男女のモデルゲームを使用しての実技講習
- 18:40 <講義Ⅳ> 【研修センター講堂】
「ルールについて」
講師: 平野彰夫氏 (規則委員長)
- 19:00 <講義Ⅴ>
「全日本ナショナルチームの諸活動に参加して」

講師：貝塚宗義 氏（元全日本ナショナルチーム マネージャー）

19：20 <講義VI>

「世界トップレベルで求められるレフェリングとは」

講師：Mr.Costas Rigas (FIBA)

20：50 閉講式 【研修センター講堂】

- 1.部会挨拶（吉田 利治 部長代理）
- 2.講師代表講評（関口 知之 副部長）
- 3.諸連絡 総務委員会

8月15日（日） 【3日目】

9：30 <実技II> 【上尾運動公園体育館】

各自の帰りの交通機関にあわせて随時解散

○講義・ミーティング内容

<講義I> 「アスリートと食事について」

講師：河谷 彰子 氏（横浜FC栄養管理士）

【内容】

レフリーもプロアスリートの1人として食事から管理していく必要がある。

食事は主食(ごはん)、主菜(おかず)、副菜(野菜)の3つをそろえることが、良いコンディショニングに繋がっていく。野菜を多めに取ったり、油を控えたりするなどのちょっとした意識で食事の内容が変わり、それが自然と体にいい影響を与える。栄養補給もサプリメントなどには頼らず、しっかりと食事で栄養を摂ることが大切である。その中でも特に朝ご飯を意識していくことで効果的な栄養補給を行うことができる。食事は単に栄養をとる行為ではなくコミュニケーションをはかるツールとしても重要で、楽しく、食材をおいしく食べることで組織や人間関係にも大きなメリットがある。

試合前の食事については試合の3時間前には食事を終わらせておく。消化のよい食べ物を摂取し、食べる量は空腹になりすぎない。腹痛を起こさない。そして良いパフォーマンスをすることができる程度の量を摂取することが重要である。

<栄養管理士から見るプロ意識を感じる点>

- 1、1日のリズムを大切にしている。(朝食をしっかり食べ、自己管理ができています。)
- 2、言われたことは自分の考えと根拠を確認して試す。
- 3、職にもトレーニングにも、ある程度のこだわりがある。
- 4、ON、OFFのメリハリができています。
- 5、周りとのコミュニケーションを積極的にとることができる。
- 6、常に誰かに見られているという意識がある。
- 7、試合にピークを合わせている。

リズムや自分の考え方など、経験から「自らのこだわり」ができ、高いパフォーマンスを発揮する要因となっている。

<映画> 映画上映「REFEREE」

【内容・所感】

サッカーの審判員のドキュメンタリー映画で、EURO2008での審判員の舞台裏での活動や、実際に担当したゲームの内容に焦点をあてた内容である。

サッカーの審判は3人で行い、3人それぞれが耳にイヤホンをつけて審判を行っている。そのイヤホンを通じて、広いピッチの中で死角(ブラインド)を作らないように密に連絡を取りながらレフェリングを行っていた。また、試合終了後に問題だった点をVTRで確認をしていた。審判への抗議はもちろんのこと、本人の問題だけでなく、家族にも危険が及び、政治にも問題が波及してしまう点には衝撃をうけた。技術が発展してきている世の中、選手は生身の体だけで勝負をしている。審判も同じであり戦い続けなくてはならないと映画を鑑賞して感じた。ミスジャッジやクレームにも、ピッチの上では毅然とした態度で立っている姿は、バスケットボールの審判にも通じるものがあった。

<講義Ⅱ>「英会話の重要性」講師：梶川 三枝 氏(SPORTS FOR SMILE,元デトロイトピストンズ)
梶川氏の海外での経験、体験談(世界バスケットボール選手権でのVIP対応や故サマランチIOC名誉会長のアテンドを務めるなど)を含めて英会話の重要性をレクチャーしていただいた。

<英語を身につけるためには>

- (1)英語に触れる。(映画や英語で書かれているルールを読むなど知っているもの、身近なもので触れるとよい。)
- (2)英語でも日本語でもコミュニケーションを取る
- (3)英語を学ぶ環境を作る
- (4)言語は慣れなので、英語を耳にする機会を増やす。
- (5)最低限の単語や文法を勉強すること。

<講義Ⅲ> 「Fundamental (2 Person System) ・よい審判員になるためには」

講師：Mr.Costas Rigas (FIBA)

【内容】

Costas Rigas 氏の講話の中で重要であると感じた点は、下記の通りである。

- ・日本人は丁寧で礼儀正しい→審判では人格を変える必要もある。
- ・審判というのは、コート上で唯一中立の立場であるということ。
- ・ルールは文章で書いてある。ルールの文章の裏に何があるのかを理解して正しくコート上で表現することとしてほしい。
- ・審判員の立場として大切なことは、正直であること・常に努力をしている人、一生懸命、努力家であるということである。
- ・正しい判定をするには、正しい場所・タイミングを逃してはならないので、メカニクスを正しく理解すること。
- ・レフリーというのは、その日に勝つべきチームが勝ち、活躍するべき選手が活躍するという場を作り出すということがレフリーとしての仕事である。

- ・完璧な人間もレフリーもいない。ミスは付き物であるということを忘れないで取り組んでほしい。
- ・自分を信じて、常に冷静に取り組んでほしい。
- ・審判が人々の記憶に残らないのは良いこと。
- ・自分の体を鍛えることと同じように精神的な心の準備にも時間を割くことが大切である。

○上級審判員として必要なこと。

(1)場に応じたふさわしい服装，容姿，態度

(2)勇気・自信を持って笛を吹く。自分で確実に見たものだけを取り上げる。

(3)正直であること。

(4)一貫性を持つこと。(選手との間で良い関係を築くことができる。)

(5)正しい知識・ルールを理解を身につける。(ルールの文の裏に何があるのかを深め，武器にする。)

(6)知性を磨く。(知性は教えてもらうのではなく，自分が育ってきた環境の中で築き上げていくもの。)

最後に、ゲームを感じることを(Feel For The Game)が大切だと言われた。その中で判定が正しいかどうかではなく、そのゲームにとって正しいかどうか(Not who is right But who is right)が重要だという事を自身のオリンピックでの体験談を交えて話していただいた。

<班別ミーティング>

班別ミーティングでは、まず自己紹介をし、その後、平野氏より出された課題を班で討論しました。課題は、「どの班も回答できない、ルールの問題の作成」でした。グループで討論し、1つのルールテストを作ることで、班の仲間とも交流することができました。

<講義IV> 「ルールについて」

講師：平野 彰夫 氏(規則委員長)

【内容】

初日に行われた班別での課題作成（ルール問題）をもとに班ごとに課題解決をしました。

<2 班の問題>

A3 がショット動作中の B4 にアンスポーツマンライクファウルをし、そのショットは不成功だった。その直後に B4 が A3 にテクニカルファウルをした。審判は二つのファウルの罰則を相殺した結果残った、あとの B4 のテクニカルファウルの罰則に含まれるスローインのみを適応した。

この問題は罰則の相殺と再開についての問題でした。しかし、この問題にはアンスポーツマンライクファウルが 2 ポイントか 3 ポイントシュットのどちらのショットかが、書かれていなかったため問題としては不十分なものになってしまいました。2 ポイントのショットに対するアンスポーツマンライクファウルであれば、罰則の相殺が適応され、テクニカルファウルのスローインで再開します。しかし、3 ポイントに対するアンスポーツマンライクファウルであった場合、3 本のフリースローになるためテクニカルファウルの罰則と等しくなりません。結果、それぞれの罰則を行ったあとにテクニカルファウルの罰則によるスローインからゲームを再開します。これは、アンスポーツマンライクファウルに対するショットがバスケットボールカウントになるかによっても同様の処置を行います。つまり、罰則の内容（フリースローの数＋スローイン）がそれぞれ等しくなければ、罰則の相殺は適応されません。

<講義V> 「全日本ナショナルチームの諸活動に参加して」

講師：貝塚 宗義 氏

海外の現状と日本の課題という内容で7年間代表チームに在籍した貝塚氏が感じたことを話された。世界選手権、オリンピック予選、ユニバーシアード、U-16などさまざまなカテゴリーの代表に帯同して、一番に体格の差を感じてしまう。平均身長差もあるが、特に最長身長差が大きく違ってきてしまう。アジアにおいても中国や韓国ではセンターポジションに2m10cm以上の選手がいるのに対し、日本はセンターポジションに2m3cmで竹内選手でも2m5cmである。日本がこの体格差の中でどうやって活躍するかが課題である。日本は、スピードを生かしてプレイしていくことが武器である。これから国際審判を目指す皆さんが、身長差を考慮して笛を吹くということを意識してほしい。

さらには、日本の持ち味であるスピードに生かそうとするあまり、それに伴って判定されてしまうトラベリングが課題である。ドリブルの突き出しで多くとられてしまうトラベリングが結果的に接戦で勝ちに繋がらないことがある。世界大会を通じながら審判に適応していくが、代表レベルではなく、日本全体として指導者・審判員が取り組まなければならない。

<講義VI> 「世界トップレベルで求められるレフェリングとは」

講師：Mr.Costas Rigas (FIBA)

Costas Rigas 氏の講話の中で重要であると感じた点は、下記の通りである。

- ・コートで審判をする上で、必要な動き方というのを示しているのが「メカニック」である。それは、あくまでも道具の一つとして考える。
- ・バスケットの審判に対して、メカニックも重要であるが一番大切なことは、ルールだということである。
- ・スペースを見るために、いい角度でプレイを見る。そのために見るために行くべきところに行くこと。
- ・走るための目的→位置取りが目的ではなく、プレイを見るのが目的。
- ・一貫性を持つこと。
- ・トラベリングについて→正しく確認して吹かないと、ゲームが壊れてしまう。しっかりと確認する。
- ・1人のレフリーはボールを見る。もう1人のレフリーは、その他をみる。エリア5にボールがあるときは、トレイル→頭から上を確認。リード→顔から下を確認。
- ・自分の責任エリアを越えた判定に対しては、1000%の確信がなければ取り上げてはならない。

<実技I> 高校生男女のモデルゲームを使い実技講習

14日(土)

[女子] 主審

新座総合一小山西

相手審判員

小林 沙織 (東京)

講師：倉口 勉 氏 平原 勇次 氏

【ご指摘いただいた点】

- ・シグナルの確認

→交代のシグナルははっきりと。マニュアルに載ってないシグナルはしない。

- ・エリア6からのウィークサイドへのドライブ
→右に行くべきか、行かないべきか。
- ・1歩動いた後の動き
→だいたい合っている位置ではなく、完璧に合っている位置を。
- ・エリア4の3ポイントからのリバウンドの確認
→首振りをしていない。シュートをしっかりと確認する。

15日(日)

[女子] 主審

境一春日部東

相手審判員

土屋 美奈子 (茨城)

講師：吉田 憲生 氏 平原 勇次 氏

【ご指摘いただいた点】

- ・コートから目を切らない。
→トレイルからリードに移動する時。
- ・リードの時に引く動き。
→受け方がいいが、横の動きだけでなく縦の動き…上下の分担
- ・トレイルの追従
→1 on 1 を近くで見すぎない。
- ・スクリーンアウトの考え方
→バスケット的に良いのか悪いのか。

<全体の感想>

今回、YOCに参加させていただき、国際大会やユーロリーグで活躍されている Costas Rigas 氏，国際大会や日本のトップリーグで活動されている上級審判の講師の方々にご指導していただき、私にとってとても貴重な体験をさせていただいたのと同時に、大きな財産になりました。また、同年代の審判員の方と接することができとても大きな刺激を受け、モチベーションも高められました。また、上級審判員になりたいという思いもより一層高まりました。

私は、今回のYOC参加にあたり、①リード時に積極的に右に行くこと。②しっかりと動くこと。③素直に思い切り吹くこと。の3つを意識して参加しました。そして、そこから新たな課題を見つけてこようと考えてYOCに臨みました。

実技では上記のような点を意識して取り組みながら、講師の方々にさらなる課題を多々ご指摘いただきました。また、自分のミーティングだけでなく、班の他のメンバーのミーティングを聞いたり、ミーティング以外にも講師の方にアドバイスをいただいたりするなど、実技全体を通してとても充実した内容になったと思います。

また、実技以外でも、様々な講師の方の講義を聞くことができ、とても貴重な経験になりました。その中でオンザコート以外の面での審判員としての役割・自覚という点は、今回の講義で改めて考えてい

かなければならないと感じました。服装やコートに立つまでの様々な準備などが実際にコートでの審判員としてのパフォーマンスに繋がることに気付かされました。

またルールのさらなる理解も今後の審判員としての向上には欠かせないものだと痛感しました。曖昧な解釈ではルールに照らし合わせた審判は不可能です。文章を読み、ケースを想像してコート上で表現していけるように、ルールブックの通読が必要だと思いました。さらにバスケットボールの技術の理解についてもまだまだ未熟であると感じました。そのプレイがバスケットボール的に良いのか悪いのか、判断が審判員としても必要です。その理解を深めるためにも、レベルの高い試合の観戦や、実践が必要だと感じました。

以上のように、今回の研修を通して、審判員としてだけでなく社会人としてもとても貴重な研修になりました。今回の研修で得たことを今後に生かし、自分自身の審判技術の向上に邁進していきたく思います。

最後になりましたが、3日間、素晴らしい環境の中で受講できるようにご配慮いただいた、橋本信雄審判 規則部長を始め、講師の皆様、日本協会の皆様に深く感謝を申し上げます。また、今回このような貴重な機会を与えて頂きました田中審判長を始めとする県内の審判部の皆様、諸先輩方にも深く感謝を申し上げますとともに、今後の私の成長が恩返しになるということを心にとめ、これまで以上の努力をしていきたいと思えます。

ありがとうございました。